
バカとイレギュラーと奇知外

紫炎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとイレギュラーと奇知外

【NZコード】

N6047X

【作者名】

紫炎

【あらすじ】

神崎直人という転生者が『バカとテストと召喚獣』の世界に舞い降りた。彼は坂本雄一らFクラスの面々と共に愉快に高校生活を送つていく・・・・・

それだけならよかつたのに転生者というイレギュラーを世界は認めなかつた。世界はそのイレギュラーを迎えてしまつた反動を物語の主人公『吉井明久』に与えた。それによつて本来あり得ない人物に出会つてしまつた吉井明久はどんな結末を迎えるのか。

これはイレギュラーによつて歪んでしまつた吉井明久を中心とした

物語である。

この作品では明久は元の性格がありません。非人道的な発言も目立ちます。

プロローグ（前書き）

最終警告ですが元の吉井明久君はいません。

それでもいいならどうぞ。

プロローグ

俺の名は神崎直人。俺は今謎の空間にいる。辺り一面真っ白で目のか一時小説サイトで読んだ・・・・
「すまん！ わしの管理ミスでおぬしを死なせてしまったー！」
そうだ、転生のパターンの一つだ。ということは・・・・
「お詫びこと言つてはなんだがお主を転生させようと愚つ。どうぞ
や？」

やつぱりか。でもまあ、転生にはあこがれていた部分があるから、是非ともさせてもらおつ。

「じゃあ、転生先は『バカとテストと召喚獣』の世界で、能力とかは・・・・」

転生先と附加能力の希望を言つていく中でこれから的生活を思い描いて、俺は楽しみで仕方がなかつた。

世界にとって転生者は有害である

それは神の加護によつて守られているからだ

その世界の生命の輪廻させの『世界』によつて回つてゐる

世界によつて生命は調整され、世界によつて守られていく

神の加護を得た転生者には世界の意志は通用しない

故に障害が生じてしまつ

その障害は悪ければ、世界を殺す

故に自己防衛のために世界は『主人公』にその障害を押しつけ、清算する

これが一つのイレギュラーに対する反動である

この世界も例外ではなく

その影響は主人公にもたらされる

1人の少年が公園のブランコに跨つて泣いていた。1人寂しく、脇目もふらずに泣いていた。そこに1人の男性が近づく。

「どうしたんだい、君」

その男性はしゃがみ込み、少年に問いかける。すると、少年は泣きっぱなしの顔を男性に向けて、

「みんな、僕のこと『バカ』ってよぶの」と悲鳴を上げるかのように言つた。

「『バカ』？」

「うん」

男性は少年の言葉に返事をした。

「お父さんも、お母さんも、お姉ちゃんも、学校の先生も、クラスのみんなも、おじさんも、おばさんも、みんな、みんな、僕のこととを『バカ』って言つの」

少年は今まで我慢していたものを吐き出すかのように言葉を続けた。「一生懸命がんばっているのに、いつもダメなほうに『バカだ』って言われるの。テストでもいい点取れなくて、お父さんとお母さんに怒られて、お姉ちゃんにも『バカな弟』って言われるの」一通り少年が言い終わつた後、男性を見て

「どうしてなの、お兄さん？」

目に涙をためて田の前の男性に尋ねてみた。男性は少し悩んで、「私にはわからないなあ」と言った。少年は明らかに落胆して「そ、うなんだ……」と呟く。

「ただ……」

男性は少年を興味深そうに見つめて、

「私は君に大変興味を持ったよ」

男性は少年に手を差し伸べて、

「君を『研究』させてくれないか?」と誘つた。

「? 研究すればわかるの?」

少年は首をかしげて尋ねる。

「ああ、私が解明してみよう」

自信満々に男性は言い放つた。少年はその姿に魅了され

「うん! よろしくね!」

男性の手を握つた。

この出会いがこの少年の運命を大きくねじ曲げる。

これがたつた1人の少年に興味をそそられた科学者「ジュエル・スカリエットティ」とその科学者に魅了され、親しい人間にバカにされ続けた純粋無垢な少年「吉井明久」の出会いであり、この物語の始まりである。

プロローグ（後書き）

この出会いが明久に何をもたらすのか。

転生者にどんな運命が待ち受けるか。

次回をお楽しみください。

第一話・はじまつ～（前書き）

年月が過ぎ、彼らは文月学園の一度目の春を迎える。

第1話・はじまり

季節は春・・・・。

文月学園は何度目かの春を迎えた。登校道には桜が咲き、花びらが舞っていた。多くの学生が新たな気持ちで登校していく中、1人だけくるくると歌いながら歩いている生徒が居た。

「～～～」

周りの人たちは彼に奇異の視線を寄せるが、寄せられている本人はもろともせずに進んでいた。

「～～～」

周りのことなど関係なしに回り歩き、すゞく楽しそうに歌っていた。

「前を見て歩け、吉井」

「～～～　おっ、西鉄先生、おっはよ～「じぞ～」います」

正門の前で待ちかまえていた教師に呼び止められ、回るのをやめた。呼び止められた生徒の名は吉井明久。栗色の髪の色をしていて後ろまで伸びている髪を三つ編みにして纏めているのが彼の特徴。しかも、制服の上には白衣を着ていて明らかに風紀違反をしている生徒だ。

「西鉄先生ではない、西村だ。これで何度目だ?」

「392回目ですよ。おめでとうございます、もうすぐ400回目ですね」

「そんなこと数えなくていい。全く」

ため息を吐きながら西村先生は近くの箱を探り始めた。

この教師の名は西村宗一。文月学園が誇る最終兵器である。というのは誇張表現で、彼は主に補習授業担当の教師である。趣味はトライアスロン、補習は鬼の補習という二つの要素が重なり、主な生徒は彼のことを恐れている。

箱の中から吉井明久と書かれた封筒を取り出して、明久に渡す。

「なんですか、この封筒は?」

「「」の前の振り分け試験の結果だ。3学期が終わる前に書っていた
だろ？」

「ああ、それですか。興味ないから覚えていませんよ」

「おまえはなあ・・・・・・」

明久は封筒を開けようとする。そこに西村先生が

「あー、吉井。今だから言うがな、去年一年間のお前を見ていて、
『こいつはもしかしたらものすごいバカなんじやないのか』という
疑いを持つたんだ」

「それは心外ですよ、西鉄先生 そんなわけないに決まっている
でしょ 」

封筒の口が取れず、ハサミを取り出して、口を切つていく。

「そうだな、先生が間違っていたよ・・・・・・」

封筒の口を綺麗に切つた後、中身を取り出し確認する。

「吉井、お前の疑いはなくなつた」

吉井明久 Fクラス

「お前はとんだ奇知外だ！」

はにや？ と疑問詞を浮かべる吉井に西村先生は原因を言つ。

「お前、全問題、理解不能な数式をびっしりと埋めていただけじゃないか。そんなんじや〇点になるのも当然だ」

「そうですか？ あれは回答を数式化しただけですよ？」

「科目一つ一つには、その科目の答え方がある。それに則つてやらなければいくら知識があつても、意味がないぞ」

「世知辛い世の中だなあ」

対して気にも留めた様子もなく、再び明久は歌い回りながら歩いて
いく。

「あつ、待て！ まだ話は終わつてないぞ！」

「（）（）」

西村先生の制止も聞かず、明久は校舎に向かっていく。西村先生は

止めるのを諦めた。

「まあ、Fクラスにはアイツが居るから大丈夫だろう・・・・・・そろそろ登校時間も終わりかけているのを見て、残っている封筒を確認した。その中にある名前を見て本日二度目のため息をついた。

神崎　直人

第1話・はじまり（後書き）

続いてFクラスです。

西村先生が言った『アイツ』とは・・・・・?

第2話・Fクラス（前書き）

今回は三人の視点から、話が進みます。

では、どうぞ。

第2話・Fクラス

神崎 side

今年、俺は文月学園で二度目の春を迎えることになる。とつとう原作のスタートだ。普通の奴ならここでAクラスかFクラスを選ぶだろう。だが、俺はそんなことはしない。原作キャラに関わると口くな目に遭わないからだ。坂本の策略しかり、土屋の盗撮しかり、FF団の嫉妬攻撃と痛い目にしか遭わない。去年は同じクラスだつたため、どうしても仲良くなるしかなかつたが、体験してみて分かつた。

凡人が過ごすような日々じゃない。特に吉井明久！ どういう訳か、キヤラが改变している。それも悪い方向に。何度も、あいつに関わりたくないと思つたか。

一年間アイツらに付き合つてやつた俺を、ほめてやりたいと思ったぐらいだ。だから、今回はEクラスあたりを狙つて、振り分け試験に臨んだ。手応えではいい感じだと思う。その安心のせいで、

「神崎！ 遅刻だぞ！」

遅刻したわけだが。

「おはようございます、西村先生」

「おはよう、神崎。それと一言足りないぞ」

「一言足りない？ ああ、そうか。

「今日も朝から暑苦しいですね」

「遅刻の謝罪もできんのか、お前は」

「うん？ そつちだつたか。

「まあいい。ほれ」

西村先生が箱の方に手を伸ばし、封筒を掴んで、俺に渡してきた。

「どうとう来たなこの時が。俺はにわかに緊張する。

「あー、神崎。今だから言うがな、俺は去年一年間のお前を見て、

『もしかしたら「コイツバカなんじやないか』という疑いを持つたん

だ…」

「それは大いなる間違いですよ、西村先生」

封筒の口が取れにくくて悪戦苦闘する。くそつ、これぐらい……。

「そうだな、今回の振り分け試験の結果を見て、先生は自分の間違いに気付いたよ……」

「そう思つてくれるなら、嬉しいです」

「こうなつたら、破いて開けるか。

「喜べ、神崎。お前への疑いは消えた……」

封筒を破いて、中の紙を取り出す。さて、俺のクラスは……

「お前は大馬鹿者だ！」

神崎　直人　Fクラス

「そんなバカな――！」

俺の最低クラスの生活が始まつた。

明久 side

「おや、これがFクラスの外見か。ひどいねえ」

歌いながら回り歩いていたら、いつの間にかFクラスに到達した。まず最初に目に付くのは、表札がダンボールで出来ているところ、壁が割れていっているところだ。長い間、放置されていたんだね別にどうでも良かつたので、教室に入ることにする。

「やあやあ、みんな。おはよう モ「言わせねえぞ、明久！」

「誰だよ～？ 人の言葉に被せてきたのは。声の方を見ると、

「おや、坂下君じゃないか おっはよう」

「ああ、おはよう。それと俺は坂本だ。何度もだ、この会話」

「今まで2992回目だね めでとう もうすぐ3000回

目だよ」

「そんなこと数えなくていい。暇人か、お前は
思った通り、坂下君ではないか」 僕の… 一号

「坂下君が教壇にいるということは、君が代表?」

「坂本な。ああ、そうだ。俺がこのクラスの代表だ」
なるほど、なるほど。つまり、このクラスは坂下君の意のままに動くと言つことか。じゃあ、今後のプランは大幅に変更だね

「席は自由だつてよ」

「じゃあ、僕は隅つこに座らしてもうつよ」

「楽しみだなあ」、このクラスにはとてもいい“素材”が揃つてそうだからね~

雄一 side

相変わらずだな、アイツは。

「雄一よ。お主は吉井と親しいのかのお?」

疑問を浮かべながら、一年の時からの親友、秀吉が話しかけてきた。

「まあ、親しいっちゃん、親しいな」

「よく付き合えるの、吉井と」

心底不思議そうな顔をして、秀吉が言つ。まあ、当然か。

明久は高校一年の自己紹介の時に、余りにもぶつ飛んだ紹介と後の奇行で、寄つてくる奴は居なかつたし、自分の興味を持つたことにしか、関心を寄せなかつたからな。

そのせいで、友達なんて出来やしないし、文翔学園『友達にしたくないランキング』上位ベスト3入りしたからな。同級生だった奴らも薄気味悪がつていたから、余計にな。

「……正直、坂本の懐の大きさに感服する」

「そうじやの。雄一よ、何かあつたら、相談するのじやぞ」

「そんなんじやねえよ……」

そんなんじゃねえーだ。アイツと俺の関係は……

昔を思い出し、少し鬱になるが、もうすぐ来るであろう“バカ”を考え、思考を切り替えた。同時に

「すいませーん、遅れました」

とバカっぽい声が聞こえてきたので、俺は“バカ”で憂き晴らしをする。

「早く座れ！ このウジ虫野郎！」

第2話・Fクラス（後書き）

どうでしたか？

雄一はこの小説の明久を知る上で、鍵となります。

今後の展開をどうやっていくか少し悩むところですが、ちゃんとしました展開にしてこうと思っています。

どうぞ、ご期待を

第3話・自己紹介（前書き）

今回は明久の爆弾発言。 というよりこれを書きたかった。

第3話・自己紹介

神崎 side

「うわあ、なんだこれは……」

鉄人こと西村先生にクラス分けの封筒をもらつた俺は、今Fクラスの前に立つていた。そこで見た光景はライトノベルで読むよりもすごかつた。表札がダンボールつて……

「これが格差社会なんだな……」

先ほど見たAクラスと比べての落差が大きすぎて、嫌になる。だが、落ち込んでいてもしょうがない。いざ、Fクラス！ 僕は気持ちを切り替えて、新しい一步を踏み出した。

「すいませ～ん 遅れました」

「早く座れ！ このウジ虫野郎！」

最悪だあ！ 入つて早々罵倒されるとは！ いや、待て神崎直人。もしかしたら聞き間違いかも知れない。

「聞こえないのか、アアン？」

聞き間違いじゃない。誰だと思い、声の方向を向いたら、

「……何やつているんだ、雄二」

「先生が来ないから教壇に立つてみた」

「雄二」が教壇に立つていた。そうか先ほどの罵倒は雄二だつたのか。それなら理解できる。

「つか、何で教壇にいるんだよ」

「俺はクラス代表だからな。全員の顔を見回していたんだ」

「雄二」が代表？

「つまり、こここの奴らは全員俺の駒だ」

あぐどい笑みを浮かべて俺を見る雄二。なるほど、原作通りなんだな、そこは。

「すみません、通してもらいますか？」

俺が雄二に話しかけようとしたとき、先生らしき人物が入ってきた。

この人が担任か。

「先生、席順はどうなつてているんですか？」

「決まってないので、ご自由にござぞ」

「決まってないのかよ！？」

手抜き過ぎだろ！？ 大丈夫か、このクラス！？

雄二-side

H.R.が始まり、自己紹介に入る。ここでの設備は散々なものだが、俺が考えるプランには丁度いい状態だ。あとはどのタイミングで仕掛けるか。

「すう～」

俺の隣で寝息を立てながら寝ている明久を見た。コイツが協力してくれれば絶対に勝利は間違いないような気はするが、どうやってコイツを動かすか……。しようがない、あの手で行くか。大体のプランをまとめて、どんな演説をしようか考えているとき、

「あ、あのっ。遅れてすみません……」

姫路瑞希が入ってきた。そういえば直人（バカ）が姫路について何か言っていたな。それか。

紹介が終わり、こちらに逃げるようになって、座った。後々のために話しかけとくか。

「ひめ「姫路」」

んつ？ 今なんか聞こえたような……まあ、いいか。

「代表の坂本だ。よろしくな。」

「は、はい。よろしくお願ひします」

挨拶も終わり、そういうふうと気になることを聞いた。

「体調は大丈夫なのか？ 試験の時に体調を崩したと聞いたが……」

「あつ、俺も聞きたい」

「か、神崎君！？」

「か、神崎君！？」

直人が話しかけてきた瞬間、姫路は大いに驚いていた。ああ、なるほど。

「姫路、直人がブサイクですか？」

直人に変わり、俺が謝罪しておいた。直人が何か言っているが無視だ、無視。

「そ、そんなこと、ありませんよ。顔は整っているし、目も開いていて……」

姫路が褒めるが、直人が褒められるのは気に入らん。

「確かに見てくれば悪くないかも知れないな。俺の知り合いも興味があるという奴も居たし」

「えつ、それって「それって誰ですか！」うおつ！？」

「確か、久保……」

よし、いい具合に食いついているな。ここで落としてやるか。

「利光だつたか」

久保利光（男）

直人が落ち込んでいるのを見て、満足した俺はフォローをしてやることにした。

「安心しろ直人。半分冗談だ」

「待て、雄二。半分ってどういう事だ」

「そうですか、冗談ですか」

「ああ」

「雄二、半分ってどういう事だ！」

「こらこらそこ、騒がしいですよ」

「あ、すみません。せんせ……」

ゴシャァー……

騒がしくなった俺たちを注意するために、教壇をたたいた教師だったが、たたいた瞬間、音を立てて崩れ去った。

「……えー、替えを持ってくるので少々待っていてください」

教師が新しい教壇を取つてくるために教室を出た。

「……なあ、雄二。ちょっとといいか」

「うん?
何だ」

「やあ、話したくないがどうせひとつと外で

そう言って、直人は俺を廊下に連れ出した。何だ、一体？

明久 s i d e

一
ふあ
～～～

丁度朝寝から目が覚めた。今後のプランの設計も終えたしね。楽し
みだなあ〜

「吉井君、君の番ですよ」

おりよ？ もしかして自己紹介なのかな？ そうだ、みんなに言わなくちゃならないことがあるんだつた。坂下君が「余計なことを言うなよ」みたいな視線を送る。大丈夫だよ 变な事なんて言わないから。みんなを見て、僕は自己紹介を始めた。

「おはよつ、実験体（モルモット）諸君　今日からみんなの体で実験と研究をしていくから、目立たないモブキャラの」とく、僕の実験台になつてね　よろしくおねがい、ね」

僕は特上の笑顔で言い切った。あれ、何でみんな凍り付いたような表情をしているの？

第3話・自己紹介（後書き）

これを受けてのみんなの反応はいかに・・・・・？

次回をお楽しみに。

第4話・後戻りは出来ない

雄二 side

「おはよう、実験体（モルモット）諸君　今日からみんなの体で実験と研究をしていくから、目立たないモブキャラの「」とく、僕の実験台になつてね　よろしくおねが～い、ね　」

あのバカ……。

直人の提案を廊下で聞き終えて、教室に戻り自己紹介が再開して明久の番になったとき、俺は後悔した。

そうだ。アイツの常識は普通の人比べて、ぶつ飛んでいることを忘れていた。さつきのように言葉を被せれば良かつた。

俺が心中で後悔していると、止まつた時間が動き出すかのようになりクラスの人間が猛反発した。

「ふざけんな！ 誰がモブキャラだ！？　俺は主人公だ、ボケエ！」

「そうだ！ 大体モルモットだと！？　ふざけんじゃねえ！」

「俺たちはお前のために生きている訳じやねえよ！」

「わしらのことなど、そんな目で見ているのじや！」

「そうよ！ バカにしないで！」

「帰れ、この野郎！」

ところ彼処から反発の声が上がる。うるさくてしょうがない。こうなるからちゃんとと言えとアイコンタクトで言つたんだ。あんまりうるさいので黙らせようとした。

「うん　元気があつて結構だよ　でも、近所迷惑を考えようか。みんなの大好きな姫路さんが迷惑しているよ　」

だが、それよりも先に明久が喋り、全員ハツと姫路に申し訳なさそうな視線を送つた。姫路は「大丈夫です」と言つているが、少し顔色が悪そうだった。明久は言い終わつたとばかりに座つた。その後、全員が明久に対して、怒りを込めた視線を送るが、明久はそよ風のよう受け流していた。

(おい、明久)

俺は注意するために話しかけることにした。

(うん？ なんだい、坂下君)

(坂本だ。他の人間から反感買つてどうするんだよ、お前は)

(人間？ 何言つているの？)

明久は笑顔を浮かべて言い放つ。

(僕の視線には坂下君以外、モルモットにしか見えないよ)

ゾクツ！！

笑顔で言い切る明久に、俺は久々に薄ら寒いものを感じた。

そうだ。コイツは一部を除いて『実験』と『研究』にしか興味がない。だから、コイツの視線には俺以外は『実験素材』、要はモルモットにしか見えないのだ。ゆえに、人を人と見ない、とんだ奇知外、いやそんな言葉では言い表せない『何か』なんだ。久々に実感したぜ……、長いつきあいだがコイツが時々出すこの『雰囲気』には一向に慣れない。

「えへ、坂本君。君が最後ですよ」

呼びかけられて、もう最後なのかと気づく。ここは一気に空気を替えてやるか。俺は席を立ち、教壇に向かう。教壇にたどり着き、全員を見据えて自己紹介を始める。

「代表の坂本だ。代表とでも坂本とでも何なりと呼んでくれ」

全員がこちらに注目する。よし、いい感じだ。

「さて、みんなに一つ聞きたい」

俺は教室の各所を見る。

かび臭い教室

綿が入つてない座布団

足の折れた卓袱台

割れた窓

他の奴らも俺につられて見る。改めて見ると酷い有様だな。

「Aクラスは冷暖房完備の上に座席はリクライニングシートらしい
が・・・」

「ここで一拍おく。

「不満はないか?」

『大ありじゃあ――――!』

Fクラス男子、魂の叫び。つか、うるせえ。ここまで声をあげると
は思わなかつた。

「いくら学費が安いからと言つてもこの設備はあんまりだ!」

「そもそもAクラスだつて同じ学費だろ? あまりにも差が大きすぎ
ぎる!」

不満が爆発してところ彼処から不満の声が上がる。よし、いいぞ。
これだけ不満があるならけつこうだ。

「だろう? 僕もこの現状に代表として大いに不安を抱えている
次の言葉を言つた瞬間後戻りは出来ない。だが、上等。

「そこで代表としての提案だが・・・FクラスはAクラスに試験召
喚戦争を仕掛けようと思つ!...」
やってやろうじゃねーか!

第4話・後戻りは出来ない（後書き）

次回、根拠の紹介です。

第5話・戦力分析（前書き）

長い間時間をねらました。

続きをどうぞ。

第5話・戦力分析

問題

以下の意味を持つことわざを答えなさい。

- (1) 得意なことでも失敗してしまうこと
- (2) 悪いことがあつたうえに、さらに悪いことが起きる喻え

姫路瑞希の答え

- (1) 弘法も筆の誤り
- (2) 泣きつ面に蜂

教師のコメント

正解です。他にも（1）なら“河童の川流れ”“猿も木から落ちる”（2）なら“踏んだり蹴ったり”、弱り目に祟り曰“などがありますね。

土屋康太の答え

- (1) 弘法の川流れ

教師のコメント

シユールな光景ですね。

神崎直人の答え

- (2) 泣きつ面蹴つたり

教師のコメント

あなたは鬼ですか。

吉井明久の答え

- (1) 科学者の実験失敗
(2) 僕

教師のコメント
堂々と不幸の象徴として名を上げるとは思いませんでした。

「FクラスはAクラスに試験召喚戦争を仕掛けようと思つて……」
突然の雄一の提案に一瞬場は静かになるが、一気に非難の嵐が巻き起こる。

「勝てるわけがない！」

「これ以上設備が落とされるなんて嫌だ！」

「姫路さんが居たら何もいらない！」

うう、うるせえ。ここまでうるさいとはおもはなかつた。雄一、早く治めろよ。俺の心の声に反応するかのように雄一は不敵な笑みを浮かべながら言い放つ。

「お前ら、静かにしろ。俺が何の考えもなしにこんなことを提案すると思つていいのか？」

「思つ~」

「よし、明久。お前とはあとでじっくり話すから、静かにしてろ」
吉井の思わぬ返事にも動することなく雄一は切り返す。他の奴らは疑惑も目で雄一に注目していた。

「いいか？ このクラスにはAクラスに勝つことが出来る戦力がある。今からそれを証明してやる」

そう言うと雄一は姫路の方に注目する。

「土屋、畠に顔つけて姫路のスカートを覗いてないでこっちに来い
…………（ブンブン！）」

「はつ、はわ！？」

必死になつて顔と手を左右に振る否定のポーズをする土屋。あそこまで堂々と覗くのもある意味驚嘆に値するが、俺はいつかアイツが捕まるではないかと心配している。土屋は雄二に言われたとおり雄二がいる教壇の方に向かつ。……畠の後をさすりながら。

「土屋康太。こいつがあの有名な寡黙なる性識者（ムツツリー）だ」

「…………（ブンブン！）」

やつぱりばらすか、雄二は。土屋康太という名前は知られていないが、ムツツリーこという名前は別だ。その名は男子には恐怖と畏敬を、女子には軽蔑を以て挙げられる。

「姫路のことは説明する必要もないだろう。既だつてその力はよく知つているはずだ」

「えつ？ わ、私ですか？」「

「ああ、ウチの主戦力だ。期待している」

雄二の言つとおり、試合戦争をやるなら、姫路さんはFクラス最大の戦力になるはずだ。

「ああ。彼女さえいれば何もいらないな」と言つた、さつきから姫路さんに妙なラブコール送つてゐる奴いるぞ。

「木下秀吉だつている」

秀吉は学力では名前を聞かないが、演劇部のホープで名が通つている。他にも双子の姉の事など。

「おお……！」

「ああ。アイツ確か、木下優子の

「当然俺も全力を尽くす」

「確かになんだかやつてくれそうな奴だ」

「坂本つて、小学生の頃は神童とか呼ばれていたか？」「

「それじゃ、振り分け試験の時は姫路さんと同じく体調不良だったのか」

「実力はAクラスレベルが三人もいるってことだよな？」
気がつけば、クラスの士気はどんどん上がっていた。

「それに、神崎直人だつている！」

シーナン・・・・・

そして下がつた。

「ちょっと待て、雄二！ どうしてそこで俺の名前を呼ぶんだ！
全くそんな必要はないよな！」

俺は心外だ、ばかりに雄二に抗議するが、肝心の雄二はビコ吹く風だ。

「誰だよ、神崎直人つて」

「聞いた事ないぞ」

「ホラ見ろ！ せっかく上がりかけてた士気に翳りが見せてているじやねーか！ 俺は雄二たちと違つて普通の人間なんだから、普通の扱いを……つてなんで俺を睨む！？ 士気が下がつたのは俺せいじゃねーだろ！」

何故そこで俺の名前を挙げる！？ そこは吉井明久だろ！？ 原作と違い、本来吉井のポジションに俺が入りつつあることに危機感を覚えながら俺は言つ。だが、雄二は俺の話を聞かず、言つた根拠を言い始めた。

「そうか。知らないようなら教えてやる。こいつの肩書きは>観察処分者くだ」

「いいやがつた、こいつ！」

「……それって、馬鹿の代名詞じゃなかつたっけ？」

クラスの誰かが見当違いのことを言つ。俺はそれを否定する。

「ち、違う！ ちょっとお茶目な十六歳につけられる愛称で……！」

「そうだ、バカの代名詞だ」

「肯定するな、バカ雄二！」

「この野郎！ 僕に変わって話を進めるんじゃねえ！！

「あの、それってどういうものなんですか？」

姫路さんは知らないらしく雄二に尋ねる。

「具体的には教師の雑用係だな。力仕事などの類の雑用を、特例として物に触れられるようになつた召喚獣でこなすといった具合だ」雄二がそう解説する。召喚獣は本来は召喚獣以外の物に触れる事ができない。最も学園の床には特殊な処理が施されて、立つことはできるらしい。

しかし、俺の召喚獣は別だ。雄二の言つとおり、物に触れられる特別仕様なのだ。最も物理干渉能力のある召喚獣は召喚獣の負担の何割かは召喚獣の召喚者にファイードバックされるが。

「おいおい、観察処分者 つてことは、試召戦争で召喚獣がやられると本人も苦しいって事だろ？」

「だよな、それならおいそれと召喚できないヤツが一人いるつてことだよな」

俺以外にも知つてる奴がいるらしい。

「気にするな。どうせいてもいなくとも同じような雑魚だ」

「雄二？ そこは、俺をフォローする台詞を言つべきだよな？」

時々思う。俺は本当にこいつと悪友なのだろうか。

「とにかくだ。俺たちの力の証明として、まずはDクラスを征服しようと思つ」

俺の抗議は大胆に無視された。

「皆、この境遇は大いに不満だろ？」

「当然だ！！」

雄二の言葉に触発され、クラス中が大いに盛り上がる。姫路さんもその雰囲気に圧されたのか、小さく拳を作り掲げていた。

「直人にはDクラスへの宣戦布告の使者になつてもらう。無事大役

を果たせ！」

「……下位勢力の宣戦布告の使者つてたいてい酷い目に遭つよな？」
宣戦布告の使者などやりたくない。俺は雄一の言葉に疑問を投げかける。

「大丈夫だ。やつらがお前に危害を加えることはない。騙されたと思つて行つてみる」

「本当か？」

「もちろんだ。俺を誰だと思っている」

雄一が自信満々に答える。もしかしたら原作の改変があるよう、「元」、
酷い目に遭うこともないかも知れない。それなら……

「大丈夫、俺を信じろ。俺は友人を騙すような真似をしない」

雄一は力強く、俺を信じろと言つ。そこまで言つならな……。

「わかった。それなら使者は俺がやるよ」

「ああ、頼んだぞ」

俺はクラスメイトの拍手と歓声を背に宣戦布告の使者としてロクラスへと向かつた。

雄一—side

さすが直人。簡単に騙されやがる。俺は今後の直人のポジションを考えながら、内心笑つていた。

「人が悪いねえ～、坂下君も」

「坂本だ、明久」

考え事をしていたら、明久がいつものペースで俺に話しかけてきた。
珍しいな、こいつから話しかけてくるなんて。

「何のようだ？ 明久

「雄一君の企みに参加してあげようかなって思つてね」

「お前が？ あと雄一な」

確かにこいつが参加してくれるなら相当助かるが、何の対価もなしにこいつが協力してくれるとは思えない。

「……何が目的だ？」

「べつにい～？ いつも通りデータ採取するだけだよ～？」
気の抜けた笑みを浮かべながら明久は返事をする。そつか、試召戦争が起これば、こいつの実験と研究がはかどると言つことか。そう考えれば少し得したな。取引をしてこいつを引っ張り出さなくともいいしな。

「わかった。回復試験をちゃんと受けよう？」

「あ～い」

俺の回答に満足したのか明久は自分の席に帰つていった。俺は最初に考えていた試召戦争の作戦を変更する必要があるなどと思い、作戦を練り直すことにした。まあ、今はとりあえず、

「騙されたあ！！」

ボロボロになつて帰つてきた馬鹿をけなすとしょつ。

第5話・戦力分析（後書き）

どうでしたか？

次回もお楽しみ。

第7話・僕もかくろ、おひでひみつ

でんでんでんぐりかくして、バイ

Dクラス戦は省略します。神崎君は原作明久と同じ扱いと思つてください。

それでねじりだ。

第7話・僕もかえろ、おうちに帰ろう　でんでんでんぐりかえして、バイ

「それでは回復試験を始めてください」

高橋先生の言葉と共に姫路は真剣に、明久はマイペースに、二人は異なるスピードで問題を解き始めた。

Fクラスは宣戦布告をした後、昼食を取り、午後からDクラス相手に試召戦争を始めていた。この二人は振り分け試験の時に姫路は途中退席、明久は意味不明な回答をしたため回復試験を受けて点数を回復していた。他の人たちは戦争真っ直中である。

姫路は問題の選別をして少しでも早く、多くの問題を解いていく。そんな中ちらりと明久を見る。彼は最初と変わらず笑顔を崩さずマイペースに、ゆっくりと解いていた。あまり明久を見ていたらカンニング扱いにされてしまうので、視線を問題に戻して問題を解き始める。姫路はある程度問題を解いた後、高橋先生に採点を申し出る。高橋先生はそれを受理し、尋常ではないスピードで採点していく。

「採点、終わりました」

「はい、ありがとうございます」

採点が終わると同時に教室を出て、前もって指示されていた位置に向かう。いまだ回復試験を受けている明久を置いて。

『Dクラス代表、戦死。よつて、Fクラスの勝利です。繰り返します……』

代表戦死の放送が掛かり試召戦争が終わった。

「あ～あ。終わっちゃった」

特に残念がる様子もなく明久は問題を解くのをやめた。試召戦争中ずっと回復試験の監督をしていた高橋先生は彼を見て呆れる。

「どの口でそれを言うんですか。ずっと問題を解いていた吉井君」

「いいじゃないですか 勝てたんですね」

高橋先生の言葉になんでもない様子で答える明久。

そうなのである。明久はDクラスとの試召戦争中、ずっと回復試験を受けていたのである。普通なら姫路のようにある程度解いたら戦線に向かうのだが、彼はそんなことをするわけでもなく、全教科の回復試験を受けていた。問題が難しかったのか、それとも戦争に出るのが面倒くさかったのか、はたまた別の目的があつたのか。高橋先生はそれを知ることはない。だつて彼、吉井明久は誰よりも奇知外で何を考えているのかわからない人間だからだ。

明久は用は済んだとばかりに教室を出る。高橋先生は明久のテストの採点に取りかかった。

「明久」

「うん？ なんだい？ 坂下君」

教室に置いていたパソコンを立ち上げて、今日の試召戦争のデータ採取を終わらせて帰ろうとしたときに雄一が明久に声を掛けた。

「坂本な。今日の出来はどうだつた？」

「まづまづかな 問題は難しくなかつたし」

「そうか。じゃあ明日から戦争に出ても大丈夫だな？」

「うん、いいとおもうよ」

雄一は名前を訂正した後今日の回復試験の出来を聞いた。明久はそこまで難しくなく、明日には出られると答えた。ずっと回復試験を受けていたことに対するお咎めはないらしい。

「出るからには派手にやつても良いが……やり過ぎるなよ？」

「やだ」

「だと思つた……」

雄一は注意をするが明久はやだと明確に拒否する。それを予想通りの返事だと雄一はため息をついた。

「……全滅だけはやめろよ?」

「いいよ~」

これ以上明日のことでの注意を促しても無駄だと思つた雄一は最悪の結末だけはやめてくれと頼んだ。それに対しても明久は肯定の返事を返して、ちゃつちゃと帰つていった。雄一はやっぱリアイツに協力を促すのはやめるべきだったかと少し後悔していたが、これ以上考えても仕方がないと自分も家路についた。

「ただいま~」

「お帰りなさいませ、明久様」

「うん~」

家に帰つた明久を出迎えたのは一人のメイドであった。明久はそのメイドに荷物を預けるとそのメイドと一緒に書斎に向かう。

さて、ここで明久の住居の話をしよう。明久の住居は3LDKのマンションではなく、少し古い一階建ての大きな洋風の館である。庭もそれなりに広く、部屋の数も多い。例えるなら某弾幕シュー・ティングゲームの紅い館より少し庭が狭く、窓が少し多いぐらいだ。無論メイドと執事もあり、それぞれ館の掃除、洗濯、食事など家事全般をやつている。明久が特に信頼している者たちにはある管理をさせているのだが……また後ほど。彼らは外部から通うものもいれば住み込みで働く者もいる。大抵は住み込みで働くのだが。そしてこの館の主人は先ほど帰つてきた高校生、吉井明久である。明久は自分の実験に最適な場所はないかと探した結果、この館が丁度良かつたので館を買って住んでいる。とある事情によつて、明久はお金に困らなくなつたのだが、逆に支出より収入が大幅に上がつたためメ

イドや執事を雇つて消費している。

長々と説明したが要は主人は明久で、それに付隨してメイドや執事があり、大きな館で日々を過ごしているのである。

話を本筋に戻そう。明久は先ほどのメイドを連れて書斎に引きこもり、パソコンのデータを家のサーバーに移していた。

「今日はどうでしか？」

「ん~？ まづまづといった感じかな？」

メイドは明久に今日の学校生活はどうでしたかと尋ねる。明久はいつもと変わらないといった感じで答えた。

「何か変わったこと無かった？ 桜？」

桜と呼ばれたメイドは懐より手紙と書類を数枚取り出して、明久が作業している机に邪魔にならないように置いた。明久はそれを手にとつて、見てみる。

「本日は世界各国より技術要請と口座に金の振り込みがありました」

「また~？ 国の偉い人は何を考えているのかな~？」

「恐らく明久様の技術と知識を捨て置けず、自分の手元に置きたいのでしよう」

今日あつた出来事を明久に報告すると明久はまた~？とうんざりとした表情になつた。桜は推測で、いやほほ確実にといった具合に返事を返す。

「捨てて」

「かしこまりました」

明久は受け取つた手紙や書類を見ることもなく、桜に投げた。桜はそれらを受け取り全部火が付いている暖炉の中に投げ捨てた。投げられた手紙や書類がどんどん燃えていく。

「それと明久様。検体N.O.・32が死にました」

「そ。じゃあ、死亡と書いておいて」

「かしこまりました」

桜が実験で使つていた検体が死んだというが、明久は特に気にするわけもなく返事を返した。

コンコン！

不意にドアからノックする音が聞こえた。

「明久様。夕食の準備が出来ました」

「はいはい。すぐに向かいます」

執事が夕食の準備が出来たと呼びに来て、明久は作業を中断して夕食に向かう。桜もそれについていった。パソコンをつけっぱなしにして。

そのパソコンにはこう書いていた。

『試験召喚獣システムを使った人体実験結果』と……

第7話・僕もかくへる、おひ論でひらひら

でんでんでんべつかくして、バイ

びりでしたか？

ぜひとも感想、意見をお待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6047x/>

バカとイレギュラーと奇知外

2011年11月20日02時09分発行